

されていなかったのではないかと見られる。しかし、これは推定の域にとどまるので、本稿の最終形は本文とせず、下書稿(二)の最終形を本文に掲げることとした。

### 三三 産業組合青年会(本文一三七頁)

本篇は定稿形成立後さらに手を加えられて詩誌「北方詩人」に寄稿され、作者の死後同誌に掲載された(第六巻参照)。また本篇の一部を文語詩に改作したものが第七巻所収「水部の線」である。

#### 《現存稿》四。

草稿的紙葉群(三枚)、下書稿(一)切抜き断片、下書稿(二)定稿、以上五枚九面および切抜き断片二、ほかにメモ一。

#### 《生前発表》なし。

ただし、昭和八年十月、「北方詩人」掲載形は作者生前に送稿されていたもの。

#### 《本文》定稿の最終形態に拠る。

#### 《逐次形》

##### (1)草稿的紙葉群

ここで草稿的紙葉と呼ぶ三枚の紙は、いずれも赤野詩稿用紙で、いったん他の用途にあてられていたものを転

用し、本稿の詩句の下書と見られるものを、作品番号、題、日付のいずれをも付さずに、鉛筆の速書き文字で記入。そのあと鉛筆で手入れしつづ「草一」「草二」「草三」「草四」と記入して順序立て、さらにこれに紫色鉛筆で手入れし①から⑦までの数字を記入して新たな順序を与えている。

以下では、この三枚につき、一枚ごとに記述した上で、鉛筆で記された順序立てによる形態、および紫鉛筆で記された順序立てによる形態を示す。

#### (第一葉)

本葉は、片面には鉛筆の大きな字で野にこだわらず次のように記されている。(第十五巻所収書簡24下書)

拝復御懇書拝読仕

唯々感泣致候 御在任中

も色々の周囲の事情より

御厚意に背くこと度々「④にて」定めし

義理も情もなき者と被思召(以下空白)

右が斜線等により全部削除してある。最終行「義理も情もなき」の七字はゴムで消してある。

今一方の面には、野の第一行から次のように本篇草稿詩句が速書きの鉛筆の文字で記され、一部は消しゴムを使って書き直している。

でない↓⑧

〔約八字下〕神には神の身土がある↓(約十五字不明する)↓⑧

〔二行不明〕↓まつくろな並木のはてで

20 〔二行不明〕↓見えるともない遠くの町が

〔二行不明〕↓ぼんやり赤い火照りをあげる

紙面右端欄外余白、下寄りのところには「草一」と鉛筆で記入してある。

右に対して紫色鉛筆で次の手入れがなされている。

1行の次「④↓あさけるやうなうつろ」の↓な』声で

4行「並木の松はかたちもわかず↓⑧」

7行「しかも↓⑧」ときとき「④↓遠い」わたちの跡

で

15行 答へたものはいったい「何だ↓誰だ」

さらに、次のように順序の指定をしてある。

12行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して①と記入。

56行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して②と記入。

810行の行頭に横線を引き、上方へ矢印線を出して④と記入。

祀られざるも神には神の身土があると  
さう云ったのはいったい誰だ

〔二行不明〕↓まことの道は誰が云ったの行つたのと『云ふ』  
↓さういふ風の』ものでない それはたゞそのみちみづ  
からに属すると――答へたものはいったい何だ↓⑧

並木の松はかたちもわかず  
5つめたい雨は

宙でびしびし鳴ってゐる

しかもときどきわたちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に畳む夜中の雲の

10 わづかな青い燐光による

〔約六字不明〕南に走り↓まことの道は〔この行以下すべて  
ムで消したあとに書  
かれて〕

〔二行不明〕↓誰が云ったの誰が行つたのと

〔二行不明〕↓さういふ風のものでない

〔夜(二字不明)は(以下不明)↓(約七字下)〔祀られざるも↓  
それはたゞそのみちみづからに属すると〕

15 〔二行不明)↓(約八字下)神には神の身土がある)↓答へ  
たものはいったい何だ

〔どれか東の一つの尾根だ(以下不明)↓(二行不明)↓⑧

〔約七字下)〔祀られざるも↓誰が(約十字不明)と云ふもの

11 15 行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して ③ と記入。

19 21 行の行頭に横線を引き、上方へ線を出して ⑦ と記入。

## 第二葉

本葉の表の罫冒頭約五行分には、最初、鉛筆の大きな字で罫にこだわらず次のように書きかけたものが、ゴムで消してある。(第十五巻所収書簡246の下書きかけ断片か)

拝復御懇書拝読唯々

感泣の

また、本葉裏の罫末尾約十三行分には、いったん鉛筆のやや大きな字で次のように(おそらく左から右へ)記したメモが、ゴムで消してある。

◎

◎名鑑印刷の件門外不出。

◎関写真(四字)より

◎中井氏阿部氏は諾

(これは、昭和五年十一月十八日付、阿部芳太郎宛書簡の内容と関係があると思われるメモである。第十五巻所収書簡281参照)

右のような表裏の既記入文字をゴムで消した上で、鉛筆の速書き文字で、表の罫の第二行目から次の詩句が書かれている。

びしゃびしゃの寒い雨にぬれ

かすかな雲の蛍光をたよりながら

こんやわたくしが恋してあるいてゐるものは

いつともしらぬすものころの(この行の下に「二字不明」)

つくし」と記したのがゴムで消してある)

5 なにか明るい風象である

まことにわたくしはこのまよなかの

杉やいちるに囲まれて

ほのかに睡るいちいちの棟を

つきからつきと数へながら

10 どこからともわからぬ「⑦↓い」稲のかほ「⑧↓り」に漂

ひ

つかれたこほろぎ「④↓の声」や水の吹き

またじぶんともひとともわかず

水たまりや泥をわたる聲音を

「ちがった世界のひゞ(以下不明)↓速くのそらに聞きなが

し」

15 「約八字不明」並木の(約十字不明)のは↓

から松が風を冴え冴えとし

銀どろろが「風↓」雲を乱してひるが「(二字不明)↓」

へるなかに

赤い鬼げしの花を燃し

黒いすもの実をもぎる

20 頬うつくしいひと「↓び」との

「(一行不明)↓なにか無心に語ってゐる」

明るいことばの「(約五字不明)↓きれぎれを」

狂気のやうに「(約五字不明)↓恋ひながら」

このまつ黒な松の並木を

25 はてなくひとりたどって来た

あ、わたくしの恋するものは

わたくしみづからつくりださねばならぬかと

わたくし「は↓が」東のそらに

「恋↓」声高く叫んで問へば

30 「(一行不明)↓そこらの黒い林から」

嘲るやうなうつろな声が

ひとときの木だまをかへし

じぶんの「声↓恋」をなげうつものは

やがては恋を恋する「ものと↓と」

35 さびしくひとり泣いて

「来↓」来た方をふりかへれば

「まつ黒↓」並木の松の残像が

ほのじろく空に「たゞ↓」「やふ↓」ひかった

「↓」あ、↓

40 「こ、は五郎沼の岸で↓」

「西はあやしく明るくなり↓」

「ほんやりうかぶ松の脚には↓」

「一つの星も通って行く↓」

「……今日のひるま↓」

45 「鉄筆でこりこり引いた↓」

「北上川の西部の線が↓」

「『いま↓いま』まつ青に光『って↓』りだ

す……↓」

「それではむしろ↓」

「わたくしはこの黒いどてをのぼり↓」

50 「むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふ↓」

「この沼の夜の水を見やうと思ふ↓」

「……西部の線の花紺青が↓」

「火花になってばらばらに散る……↓」

右のごとく、39 行以下(裏面罫12 行目以下)はすべてゴムで抹消されている。この抹消と、先に述べたメモの抹消との先後関係は判然としない。

紙の表の右端欄外、下寄りのところには、大きな字で「草、三」と記入してあり、また26 38 行の十三行を四角く囲って、その囲いの右下角に「草二」と、やや大



きな字で記入してある。いずれも鉛筆使用。

右に対して紫色鉛筆で次の手入れがなされている。

8行 ほのかに睡る「いちいちの↓④」棟「を↓タの／いくつをつぎつぎ数へたことか」

9 ↓14行 (この六行に×印。10 11行には次の手入れもある)

10行 どこからともわからない稲のかほり「に漂ひ↓と」

11行 つかれたこほろぎ「の声↓④」や水の吹き「⑦↓の↓④」

さらに、同じ紫色鉛筆で次のように順序の指定をしてある。

6行行頭と9行行頭に小さな丸印を付け、その二つの丸を横線で結んで、上方へ線を出し⑤と記入。

10 11行の行頭に横線を引き、上方へ⑥↓と記入。

### (第三葉)

本葉表は、もと、罫を横に使って本巻所収「九〇

〔祠の前のちしゃのいろいろした草はらに〕」下書稿(二)の末尾六行がブルーブラックインクで一行おきに記入されていたもの(罫11行目まで)。それを鉛筆で四角く囲み、ぐるぐる引き回した線によって削除した上で、紙を縦に戻し、残りの罫部分と左端欄外に、鉛筆の速書きの文字で

次の詩句を記入してある。

……蜜蜂のふるひのなかに

(二)アキ 液の青い霧を降らせ

小さな虹をひらめかす

いつともしらぬすものころの

「頬うつ↓④」まなこあかるいひとびとよ

……

5

並木の松の向ふの方で

いきなり白くひるがへるのは

どれか東の山地の尾根だ

(祀られざるも)

10

神には神の身土がある)

ぎざぎざの灰いろの線

(まこと正しい道ならば

誰が考へ誰が踏んだといふ②↓

も」のでない

そこには道があるだけ「だ↓④」なのだ)

……

15

こ、はたしか五郎沼の岸で

西はあやしく明るくなり

くつきりうかぶ松の脚には 一つの星も通って行く

……今日のひるまごりこり鉄筆で引いた

北上川の水部の線が いままっ青にひかっ  
てうかぶ ① ↓④ ……

20こ、はたしか五郎沼の岸だ わたくしはこの黒いど「ろ↓

て」をのぼり

むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふその沼の夜の

水を見やうと思ふ

……水部の線の花紺青は火花になってぼろぼろ  
に散る……

右に対して、鉛筆で次の手入れがしてある。(紫色鉛

筆の手入れはない)

1 ↓5行 (この五行に×印を付し、上方余白に次のように記したも

のを、矢印でここへ導入)

正しく強く生きるといふことは

みんなが銀河「を↓④」の全体を

「ひとつのころにもつことだ↓めいめいとして

感ずることだ」

11 ↓14行 (この辺りの上方余白に、いったん次のように記したの

ち、×印等で削除してある)

いちにちいっぱいの労働は

ずるぶんくるしいことだけれども

いちばん正しいことだから

いちばん楽しくなければならぬ

12行 (まこと「正しい」の「道」ならば↓は)  
14行 「そこには↓④」②↓「二つ↓④」おのづからなる  
「②↓一つ」の「道」があるだけ「なのだ↓だ」  
(この行の辺りの上方余白に、次の語句が記入してあるが、接続不明。メモ的記入か)

永「?↓④」久の黄金の／春を／貯へる人

20行 「こ、はたしか五郎沼の岸だ↓④」わたくしはこの

黒いどてをのぼり

22行 ……水部の線の花紺青「は↓が」火花になってぼろぼろに散る……

第三葉裏は、罫の1行目から25行目まで、鉛筆の速書きの字で詩句が記されていたのが、すべてゴムで消され、その消しあとにあらためて別な詩句が書かれている。ゴムで消された詩句は、きわめて判読し難く、その中から辛うじて、次のような文字がとびとびに読みとれるに過ぎない。

並木の松「の↓④」は象をわかず

つめたい雨は

宙

るる

しかも

の

水が  
東の方  
わ

……あ

いつともしら

が風を訝え訝えとし

いつと

銀

赤

黒

頬うつくしいひとびと

雲のわづかな明暗に

稜立っていままっ黒にうかぶのは

一つの 巨きな樹だ

すぎやいちにに囲まれ「たゝて」

この をしづかに睡る

萱屋根だ

ひるは 「つめたい稲を運んでくる↓」

わらじをはいて 番羊の「太↓」犬のか

たちした

つめたい稲をはこん「で『くる↓』みた↓」だり杭を

打ったりした人たちが

そこにつかれてねむってゐる

右をゴムで消したあとに、野の3行目から15行目にかけて、鉛筆の崩し字で次の詩句が書かれている。

ここはたしか五郎沼の岸で

西はあやしく明るくなり

ほんやりうかふ松の脚には

一つの星も「またたいてゐる↓通って行く」

……今日のひるま

「↓」鉄筆でこりこり引いた

北上川の西部の線が

いままっ青にひかりだす……

「④↓わたくしは」この……「まっ↓」黒いどてをのぼり

むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふ

この沼の夜の水を見やうとおもう

……西部の線の花紺青が

火花になってぼろぼろに散る……

紙面の右肩部に鉛筆の大きな字で「草四。」と記してある。また紫色鉛筆の斜線一本が右の十三行分の詩句の上に無造作に引いてある。

また、紙面左端、野の26行目から欄外余白にかけて、鉛筆で書かれた次のような詩句と、それに対する手入れが残っている。

……

つかれたこぼろぎの声や水の泣き

まっくらな並木のはてで

見えるともない遠くの町が

ほんやり赤い火照りを「投↓拳」げる

右の「つかれた……」の行と「まっくらな……」の行

との間に、上部余白に記した次の詩句を挿入。

またわたくしと呼ばれるものの

水たまりや泥をわたる足音が

ちがった世界のひびきのやうに聞えてくる

同じ行間から下方余白へも矢印線を引き出し、まず次のように記してある。

はげしい辛酸「や↓」の白いひかりから

永久の春をつくり出すもの

これを縦線で削除し、次のように書き直してある。

あ、誰か来てわたくしに云へ

億の巨匠がならんでうまれ

しかも互に相犯さない

明るい世界は必らず来ると

以上が、仮に本篇の草稿的紙葉と呼ぶもの三枚の実状

である。(第一葉には「三二三」、第二葉には「三二二

(異稿)」第三葉には「三二二、一九二四、一〇、五」と

いう鉛筆の記入が紙面の一部にあるが、これらは自筆で

はない。)この三枚に書かれた詩句は、上記のようにな

った鉛筆で「草一、」―「草四。」と順序付けられたあ

と、紫色鉛筆で丸番号による新配列を与えられているわ

けだが、いま、その指定に従って詩句を配列してみると

次のようになる。まず、「草一、」―「草四。」の配列を

掲げる。

(草一)

祀られざるも神には神の身土があると

さう云ったのはいったい誰だ

並木の松はかたちもわからず

つめたい雨は

宙でびしびし鳴ってゐる

しかもときどきわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に畳む夜中の雲の

わづかな青い燐光による

まことの道は

誰が云ったの誰が行ったのと

さういふ風のものでない

それはたゞそのみちみづからに属すると

答へたものはいったい何だ

まっくらな並木のはてで

見えるともない遠くの町が

ほんやり赤い火照りをあげる

(章二)

あゝわたくしの恋するものは

わたくしみづからつくりださねばならぬかと

わたくしが東のそらに

声高く叫んで聞へば

そこらの黒い林から

囀るやうなうつろな声が

ひときれの木だまをかへし

じぶんの恋をなげうつものは

やがては恋を恋すると

さびしくひとり泣いて

来た方をふりかへれば

並木の松の残像が

ほのじろく空にひかった

(章三)

びしゃびしゃの寒い雨にぬれ

かすかな雲の蛍光をたよりながら

こんやわたくしが恋してあるいてゐるものは

いつともしらぬすものころの

なにか明るい風象である

まことにわたくしはこのまよなかの

杉やいちろに囲まれて

ほのかに睡るいちいちの棟を

つきからつきと数へながら

どこからともわからない稲のかほりに漂ひ

つかれたこほろぎの声や水の泣き

またじぶんともひとともわかず

水たまりや泥をわたる覚音を

遠くのそらに聞きながし

から松が風を冴え冴えとし

銀どろが雲を乱してひるがへるなかに

赤い鬼げしの花を燃し

黒いすももの実をもぎる

頬うつくしいひとびとの

なにか無心に語ってゐる

明るいことばのきれぎれを

狂気のやうに恋ひながら

このまっ黒な松の並木を

はてなくひとりたどって来た

(章四)

ここはたしか五郎沼の岸で

西はあやしく明るくなり

ほんやりうかぶ松の脚には

一つの星も通って行く

……今日のひるま

鉄筆でこりこり引いた

北上川の水部の線が

いままっ青にひかりだす……

わたくしはこの黒いどてをのぼり

むかし竜巻がその銀の尾をうねらしたといふ

この沼の夜の水を見やうとおもう

……水部の線の花紺青が

火花になってほろほろに散る……

次に紫色鉛筆手入れによる①②の配列を掲げる。

①

祀られざるも神には神の身土があると

あざけるやうなうつろな声で

さう云つたのはいったい誰だ

② つめたい雨は

宙でびしびし鳴ってゐる

③ まことの道は

誰が云つたの誰が行つたのと

さういふ風のものでない

それはたゞそのみちみづからに属すると

答へたものはいったい誰だ

④ ときどき遠いわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に疊む夜中の雲の

わづかな青い燐光による

⑤ まことにわたくしはこのまよなかの

杉やいちろに囲まれて

ほのかに睡る棟々の

いくつをつぎつき数へたことか

⑥ どこからともわからない稲のかほりと



つかれたこほろぎや水の泣き

まつくろな並木のはてで  
見えるともない遠くの町が  
ほんやり赤い火照りをあげる

## (2)下書稿(一)

本稿の第一形態は、赤罫詩稿用紙おそく一枚の表裏の罫を用いて、鉛筆できれいに書かれたもので、のちにその一部が切りとられ、別紙に貼られ、その間や後に詩句を補われて、下書稿(二)となった。本稿について現存しているのは、この下書稿(二)に貼りつけられた断片二片のみであり、そこから読みとれる下書稿(一)の内容は次のとおり。(この二片の裏面にも詩句があるが、固く貼りつけられており、透かしてもその内容をうかがうことができない。)

三二三

(一)ここから第一片表

一九二四、一〇、五

祀られざるも神には神の身土があると

あざけるやうなうつつな声「で↓が↓で」

さう云った「のはいいたい誰だ↓(余白に書き改めたらしいが、紙が切りとられているため不

明「そのあと元へもとすこととして「イキル」と記し、元の詩句の削除されたものと、この「イキル」とをゴムで消している」のはいいたい誰だ」

……「約五字不明」↓雪をはらんだ」つめたい雨が  
闇をびしびし縫ってある……

まことの道は

誰が云ったの行つたの「と↓幽」

さういふ風のものでない

祭祀「約三字不明」↓の有無」を是非するならば

卑賤の「約七字不明」↓神のその名にさへも」ふさはぬと

「答↓応」へた「ものはいいたい誰だ↓(余白に書き改めたられていて不明。「イキル」と記した) ↓ものはいいたい何  
ものと、元の詩句とはゴムで消してある)」

……ときとき遠いわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に畳む夜中の雲の

わづかに青い燐光による……

(一)ここまで  
第一片表

(二)の間何行か不明

……くろく沈んだ並木のはてで

見えるともない遠くの町が

ほんやり赤い火照りをあげる……

(二)ここまで  
第二片表

## (3)下書稿(二)

本稿の第一形態は、黄罫(220行)詩稿用紙一枚の表

10 卑賤の神のその名にさへもふさはぬと

「答↓応」へたものはいいたい何だ

……ときとき遠いわだちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に畳む夜中の雲の

わづかに青い燐光に

よる…… (一)ここまで下書稿(一)切抜き第一片貼り込み

15

「それは苦しいことだけれどもしたとへ苦難の道とは云へ」  
「いちばん正し(約五字不明)ば↓まこと正しい道ならば」  
結局いちばん楽しいのだと

「じぶん(以下不明) ↓みづ「ら」から吹き感傷」する

↓させる」

20 「これ(以下不明) ↓芝居の主はいいたい誰だ」

21 「これこ(以下不明) ↓幽」

22 「だいじ(以下不明) ↓幽」

23 「ひとつ(以下不明) ↓幽」

(右の三行分の消しあとの上に、左の内容を持つ下書稿(一)切抜き第二片が  
貼りつけてある)

21' ……くろく沈んだ並木のはてで

22' 見えるともない遠くの町が

23' ほんやり赤い火照りをあげる…… (以上三行を貼  
り込み)

24 「あ、ばくはもう匙を「二」字不明」↓幽」投げる↓幽」(一)ここま

三二三

(二)ここから下書稿(一)切抜き第一片貼り込み

一九二四、一〇、五

祀られざるも神には神の身土があると

あざけるやうなうつつな声で

さう云ったのはいいたい誰だ

……雪をはらんだつめたい雨が

闇をびしびし縫ってある……

まことの道は

誰が云ったの行つたの

さういふ風のものでない

祭祀の有無を是非するならば

25 ①→こののやがてのあかるいけしき

(ここから裏)

⑦↓落葉松や銀ドロや、⑧蜜峰、↓⑨果樹と蜜峰、小鳥の巣箱

「花粉のやう」に↓な(二不明)えがく↓部落部落の小組合

「やがての」こののあかるいけしき 落葉松や銀ドロや／『たくさ↓村ごと』小さな組合は、／ハムを『酵母』を紡ぎをつくりハム『や↓を』酵母を紡ぎ『⑦↓や靴や↓⑧』をつくり

⑨(二不明)↓その聯合の『巨きな↓ある』ものは↓その聯合の『産業組合』あるものが、

30 山地の稜をひとこ砕き

石灰抹の『億噸を得て』幾千車『か↓⑩』を「こ、らの↓⑪」酸えた野原に「こそ『ぎ↓く』↓撒いたりする」

⑫(二不明)↓さういふ風の図式をおもふ↓⑬

⑭(二不明)↓それとてまさしくきてののちは

35 ⑮(二不明)↓あらたなわびしい図式なばかり

⑯(二不明)↓さういふことを考へさせる↓⑰

「ハム、酵母(七、八字不明)果樹と蜜峰小鳥の巣箱↓背後の力はいつた何だ↓⑱」

……雨がどこかではかに鳴り

西があやしくあかるくなる……

40 ①→あ、誰か来て私に云へ『億の天才ならんで生れ』

②祭↓③祀られざるも神には神の身土があると

「しかも互ひに相犯さなない↓なほも咄くそれは『誰↓④』誰だ」

「あかるい世界はかならず来ると↓⑤」

右に對し、ブルーブラックインクで次の手入れがしてある。

1 ↓3行 上方余白に「1」と記入

4 5行 上方余白に「2」と記入

6 ↓11行 上方余白に「3」と記入

12 ↓15行 上方余白に「4」と記入

16 ↓20行 (この五行に×印を付して削除)

21 ↓23行 (この三行の上方に横線を引き、「6」と記入)

25 26行 (この二行を縦線で削除)

27 ↓32行 (この六行の上方に横線を引き、「5」と記入)

28 行 ハム「を↓や↓をつくり」酵母「を紡ぎをつくり↓『や↓⑥』をつくり『ホームスパンを↓⑦』医

薬を頒ち」

29 行 その聯合の「あるものが、↓大きなものが」

30 行 ⑧↓陰気な雲をかぶった↓⑨山地の「稜↓肩をひとこ砕き」き↓いて

32 行 酸えた野原に「撒いたりする↓そ、いだりゴムから靴を鋳たり」する↓もしやう↓もすると」

34 35 行 (この二行に×印を付して削除)

38 39 行 (この二行に二箇の×印を付して削除)

40 行 前 ①↓「しかも↓②」「そ↓こ」れら「の↓③」

④「氣鋭の『士らの↓同士の↓有士の↓有志↓同志』会合『⑤↓商(不明一字を書きかけて消し)量協商(「商量」と「協商」は並べて書)の夜半」

41 行 「なほも↓どこかで」咄くそれは誰だ

なお、本稿紙葉表裏の右下隅辺りに、定稿清書時のものと見られるペン先削らしの多くの線や「さ」「三」等の書き試みが残っている。

#### (4) 定稿

本稿は、定稿用紙一枚の表裏の罫を用いて、ブルーブラックインクで清書されたもの。一般の定稿用紙に書かれた作品に比し、やや数多い手直しや手入れが見られるので、特に第一形態を次に掲げて、説明する。

三二三

「青年↓①」産業組合青年会

一九二四、一〇、五、

祀られざるも神には神の身土があると

あざけるやうなうつろな声で

さう云ったのはいつた誰だ 艸をゆすったそれは誰だ

……雪をはらんだつめた雨が

闇をびしびし縫ってある……

まことの道は

誰が云ったの行ったの

さういふ風のものでない

祭祀の有無を是非するならば

10 卑賤の神のその名にさへもふさはぬと

応へたものはいつた何だ い「た↓⑥」きまき応へたそれは何だ

……ときどき遠いわたちの跡で

水がかすかにひかるのは

東に疊む夜中の雲の

15 わづかに青い燐光による……

部落部落の小組合が

ハムをつくり羊毛を織り医薬を頒ち

その聯合の大きなものが

山地の肩をひとこ砕いて

20 石灰末の幾千車を

荒れた野原にそ、いだり

